王妃マリー・アントワネット

1 嵐の前

遠藤周作

朝日新聞社

王妃マリー・アントワネット

1

嵐の前

遠藤周作

朝日新聞社

王妃 マリー・アントワネット
1
嵐の前
1979年3月15日第1刷発行
1980年3月25日第3刷発行
著者
遠藤周作
発行者
朝日新聞社　藤田雄三
印刷所
凸版印刷株式会社
発行所
朝日新聞社
東京・大阪・名古屋・北九州
940円
©Shūsaku Endō 1979
0023-254637-0042

目

次

迎える者と迎えられる者　7
鹿の園　25
別の運命　42
新婚の日々　60
黄昏のパレ・ロワイヤル　78
空虚なる妻　96

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

街の女に　119
運命の人　137
死刑執行人サンソン　154
花の冠　177
巴里の外では…　199
サド侯爵の脱走　222

装画・深井　国
装幀・多田　進

王妃　マリー・アントワネット

1　嵐の前

「週刊朝日」一九七八年二月三日号より十一月三日号まで連載。

迎える者と迎えられる者

「間ぬけ」
パン屋のおかみはマルグリットを大声で怒鳴りつけた。
「いいかい。何回、教えたら掃除がちゃんと、できるんだい。言っとくけどさ、これ以上、役たたずなら、店を出ていってもらうから」
少女は泣きもせず、上眼づかいに女主人を睨んでいる。その強情な態度がおかみをますます腹だたせた。
この時、客が入ってきた。黒い喪服を着たフーコ夫人だった。
「あら」
おかみは急に笑顔をつくって、
「ちょうど、焼きたてが、できたばかりですよ」
「やれやれ、助かった」
フーコ夫人は溜息をついた。

「パンひとつ買うのに、今日はストラスブールの街を歩きまわらなくちゃ、と思ったわ。どの店も今日は開けてないんだから」
「ほんとですよ」
おかみはうなずいた。
「うちの国の王子さまがよその国の小娘と結婚したからと言って、こちとらの貧しい暮し向きは変るわけじゃなし……。奥さん、何という名です？　そのオーストリアの小娘は……」
「マリー・アントワネット」
「へえ、大袈裟な名だ。しかしねえ、二人はまだ顔を合わせたことも、つき合ったこともないんでしょ。それでよく、おたがい、結婚できるもんだ。考えてみれば、尊い家に生れるのも不自由ですねえ」
大教会の鐘がなった。その荘重な響きに応えるようにストラスブールのあちこちの教会の鐘楼から軽やかな音がひびいてきた。
「あと三時間したら、その外国の王女さまがここにお着きになるという合図ですよ」
フーコ夫人は鐘音の数を指を折って数えるとおかみに説明した。
「あなた、見物に行かないの」
「行きませんよ、馬鹿馬鹿しい」
おかみは肩をすぼめ、馬鹿にしたように答えた。
だがそのくせ、フーコ夫人が店を出ていくと、彼女は急にそわそわとして店のなかを片付けはじめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「マルグリット、もう少したったら、あたしは出かけるから……お前、留守番しておくれ。怠けるんじゃないよ」

ストラスブール大聖堂前の広場には既に群集がつめかけていた。群集のなかにはサールブールやサベルヌのような離れた町から来た連中もいる。祭の時に使うアルザス風の服をわざわざ着た一群の男女もまじっている。押しあう群集を馬にのった兵士が怒鳴りつけて整理する。午後三時にマリー・アントワネット姫を乗せた馬車とその一行とがここ大聖堂広場に到着するというのに、既に昼から群集は集ってきている。

真昼から彼等がつめかけたのは、自分たちの国の皇太子と結婚し、将来、佛蘭西(フランス)国王の妃となるオーストリアの娘を見たいためだけではなかった。あと二時間でその姿をここにあらわす若い姫は幾世紀にわたる戦乱に疲れはてたこれら民衆にとっては平和の象徴でもあったからである。

そう、彼等の佛蘭西とこの姫のオーストリアとは長い長い間、干戈(かんか)をまじえてきた。一七三三年にはポーランド王位継承をめぐって二年間戦い、一七四〇年にはオーストリアの王位継承問題からやはり二年間、争ってきた。そしておのれの愚行と戦費の重さに気づいた両国はやっと目がさめた。イギリスやプロイセンのような新興国を抑えるためにも、両国が手を握るほうが得(とく)なのだ。その友好の徴(しるし)としてフランス国王、ルイ十五世の孫とオーストリア女帝、マリア・テレジアの末娘とが結婚するのが望ましいのだ。

五月の薫風のなかに美しいブロンドの髪とあどけない顔をもったオーストリアの姫があらわれる。彼女は今、二つの国にとっても、この佛蘭西の民衆にとっても、小さな天使(アンジュ)のように見えて

くる。間もなく姿をみせるその天使を悦ばせるために人々は花売りの商人から争って花を買う。楽隊も既に広場で待機している。

だが佛蘭西人たちはどんなことにも一応は吝をつけねば承知しない。一方ではこのように熱狂しているくせに、男たちはこの姫について野卑な話をそっと囁きあっている。

「知っているかい。オーストリアからフランスに入る国境でよ、あのお姫さんが何をなさったと思う。身につけた衣裳も下着もみんな、ぬいでさ、佛蘭西のものに着かえる儀式があったんだぞ」

「本当かね。じゃあお姫さんは……」

「生れたままの丸裸を、……みんなの見ている前でよ……」

笑い声が起り、まわりの女たちが軽蔑したようにふりかえった。

特別席として設けられた場所では、この市の上流階級の婦人たちが、やがてその前で跪き頭をさげねばならぬその少女に関する情報を交換しあっている。

「お気の毒に……佛蘭西語はあまり、おできにならないそうですよ。御勉強のほうは、お小さい時からお好きじゃなかったようですね」

「じゃあ、どうなさるのかしら。この国にいらっして……陛下や殿下に御挨拶なさる時……」

「皇太子殿下とは別に佛蘭西語でお話になる必要はないんじゃありません？　花婿と花嫁とは別の言葉で……」

ここでも忍び笑いが起る。

パン屋のおかみはそうした群集のなかで、できるだけ見やすい場所を見つけようと歩きまわっていた。

パン屋の女中、マルグリットもそっと店をぬけだして、これらの人ごみのなかにひそかにまじっていた。そばには、利にさとい物売りたちが菓子や砂糖水や花束をならべた屋台を出し、母親につれられた子供が、その菓子をほしいとせがんでいる。

大教会の鐘がふたたび重々しく五つ鳴った。群集は歓声をあげ、手をならした。マリー・アントワネット姫とその行列は既にストラスブールのすぐ間近まで来られたという合図なのだ。その合図に応えて、街のすべての教会の鐘もなりひびいた。

「いったい、幾つなんだい。お姫さんは」

マルグリットのそばで、男が女房らしい女にたずねている。

「十四歳？　え、そんなに小さいのか」

十五歳のマルグリットはその男の声に突然、足をとめた。十四歳。十四歳。十四歳。自分とたった一つしか違わぬ女の子のために、これだけの人々が集ってくる。市長も司教たちも大聖堂の前で整列している。子供たちが花を入れた籠をかかえて待機している。街のすべての教会という教会の鐘が鳴る。

彼女はこの瞬間、間もなくあらわれるその十四歳の姫に妬しさを感じた。

（いやな子……）

その姫にくらべて自分は何というみじめさだろう。孤児院からパン屋のおかみに引きとられて、毎日毎日、パンを焼く竈の前に灰まみれになってしゃがみ、店の掃除をし、洗濯をさせられる。マルグリットはマリー・アントワネットが憎くなった。嫌いになった……。

午後二時五十分。

遠くで祝砲が轟いた。ストラスブールのすべての教会の鐘の音が交錯して鳴りひびいた。広場から街をかこむ城壁まで並んだ群集からいっせいに歓呼の叫び声があがった。それらすべての音に驚いて大聖堂の屋根にとまった鳩の群が五月の午後の空に双曲線を描きながら舞い散った。

楽隊が音楽を奏でではじめた。市長も司教たちも上流階級の男女も直立して行列の来るのを待った。

まず銀色の兜を陽にきらめかせ、銀色の槍を右手に持った騎馬兵たちが広場にあらわれた。そしてその背後から太鼓をならし、喇叭を吹き、角笛を空にむけた軍楽隊がつづいた。幾台もの馬車がくる。それぞれの馬車には白く浮きだされた貴族たちの紋章がある。

群集たちのなかから溜息とも吐息ともつかぬ声が洩れ、それは波のように広場に拡がっていく。遂にあらわれた。ガラス張りで金色に縁どられたオーストリア王女の馬車が。

灰色がかったブロンドの髪の姫が微笑みながら軽く手を振っておられる。人々は酔ったように声をあげた。これほど可憐で、これほど愛らしい姫だとは、誰一人として想像もしていなかったからだ。

少女たちがその馬車の車輪にむけて花びらを投げる。まかれた花びらの上を馬車は進む。小さなスイス親衛隊の服装をした少年たちがその馬車と並んで生真面目に行進していく。

姫は楽しそうに微笑んでおられる。まだ十四歳だというのに、彼女はこの群集の嵐のような歓声も、街をあげての歓迎にも臆せず、ひるまず、無邪気に楽しんでおられるのだ。

「万歳、マリー・アントワネット姫」

「万歳(ヴィーヴ)、我々の王女(プランセス)」

群集の背の間からマルグリットはその微笑んだ姫の顔をきつい眼で見つめていた。

「嫌いだわ。あんな子は」

彼女は心のなかで呪いの言葉をくりかえしていた。

「あんな子は……早く、死んじゃえばいい。早く、殺されたらいい」

その夜、ストラスブール市は王女マリー・アントワネットの眼を楽しませるため、街を流れるイル河に、花を飾り蠟燭をともした舟をあまた流した。蠟燭のゆらぐ火影が河面に映え、川岸に集った群集は大司教館のテラスにあらわれた彼女の姿を見て、また歓呼の叫びをあげた。

街に到着してからも、この十四歳の王女には休む暇などなかった。次々と挨拶にくる市長や聖職者たち、鷲のような顔の老婦人たちに微笑み、首をややかしげ、たどたどしい佛蘭西語で話しかけ、それから夕刻から始った長い退屈な晩餐会にも軽やかに嬉しげに振舞い――だが、まだ義務が終ったわけではなかった。晩餐会のあと、観劇会が催された。佛蘭西語がまだよく理解できぬ王女に、その芝居が面白かったか、どうか、わからない。だが彼女はそこでも微笑み、嬉しげな様子をみせていた。

観劇が終ると、既に真夜中ちかくになっていた。それでも彼女にはまだ休息することが許されない。舞踏場ではこの地方独得の舞踊を王女に披露するため、皆が待ちかまえているからだ。

この時刻、もう、とっくにパン屋の女中、マルグリットは屋根裏部屋で眠りこけていた。眠る前、この娘は今日の午後、人々の肩ごしにかい間みた王女の顔を思いだし、ふたたび妬(ねたま)しさと

羨(うらやま)しさとを嚙みしめた……。

ストラスブールのあとナンシー、シャロン、ランス、ソワンソンと行く先々で王女は熱狂的な人々に囲まれる。どの街でも同じような顔をもった男が同じような歓迎の挨拶をした。どの街でも同じような飾りつけと同じような晩餐会や演説があった。どの街でも王女は同じように愛らしく微笑み、同じように楽しげに振舞った。

王女にとってそれらの行事はすべて苦痛だったのだろうか。いや、必ずしもそうとは言えない。彼女は彼女なりに充分、満足していたのである。自分だけが皆から注目され、自分のためだけに異国の民衆も貴族も集り、手をふり声をあげている。それは十四歳の少女の虚栄心をやはり満足させたのだ。

(もう、わたくしは大人なのだわ)と。

ソワンソンからコンピェーニュの森に向う馬車のなかで彼女は金糸の刺繍(ししゅう)で飾られた肘かけ椅子に体を休めながら、自分の今おかれた境遇をゆっくり楽しんだ。馬車には二つの部屋があり、そのどちらも内部は華麗な寝室になっていた。

窓から見える五月の佛蘭西はうつくしかった。たかいポプラが川にそって並び、その梢のむこうに綿をちぎったような巻雲がひとつ、ふたつ、浮かんでいる。小川のほとりの牧場で牛の群が草をはみ、耕作地では農夫の一家が鍬を動かすのをやめて通過する馬車と馬の行列に手をふった。

王女はもう自分がウィーンの王宮(ホフブルグ)で子供扱いにされる小さなプリンセスではなくなったことが嬉しかった。二十日前までは彼女は母マリア・テレジア女王の厳格な躾(しつけ)と勉強とを毎日、強いら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c